



「台風・気象災害全史
〈シリーズ災害・事故史3〉」

宮澤清治・日外アソシエーツ 編
発行 日外アソシエーツ,
発売元 紀伊国屋書店, 2008年7月,
477頁, 9333円 (本体価格)
ISBN 978-4-8169-2126-1

「-----. 進歩したといっても気象予報技術は完璧ではない。したがって、災害の予知も万能ではない。予知の限界を知りながら災害に備えることが肝心である。それには昔からの災害事例を学び、教訓をくみ取ることが必要である。

だれしも悪いことは、いつまでも覚えておきたくない。しかし災害体験だけは別である。子や孫に正しく伝えた災害体験、災害の伝承や石碑が防災に役立ったという例は、枚挙にいとまがない。災害教訓に学ぶ謙虚な姿勢が、最大のリスク回避策といえるだろう。-----本書総説から」

本書は西暦567 (欽明28) 年から2007年までに発生した種々の気象災害を多角的に捉えた記録事典で、目次は次のとおりである。

総説

はじめに、次の9つの各時代の気象災害：1. 中世・近世, 2. 明治・大正, 3. 昭和初期, 4. 戦時下, 5. 占領下, 6. 復興中, 7. 高度成長下, 8. 衛星時代, 9. 地球温暖化時代, 10. 防災気象業務と気象災害の変遷, 11. 戦後の自然災害による死者・行方不明者数の変遷, 12. 石碑が語る気象災害。

第I部 大災害の系譜

明治以後の大災害55例、主なものを次に示す。
Case 01 明治17年8月25日の風水害, Case 02 明治18年の暴風雨・洪水, Case 08 大正7年豪雪, Case 10 室戸台風, Case 16 カスリーン台風, Case 24 洞爺丸台風, Case 25 伊勢湾台風, Case 29 昭和38年1月豪雪 (さんばち豪雪), Case 55 2006年発達した低気圧による暴風と大雨・高波。

第II部 気象災害一覧 (時系列的に2461例)

第III部 索引, 参考文献

各パートのハイライトを次に紹介する。

総説：各時代の災害の特徴。

1. 中世・近世

9世紀頃 (平安時代前期) までは干ばつが最大の災害であった。これは灌漑の施設が少なかったことと、居住地が風水害を受けにくい所にあったためである。

10-16世紀は戦国時代で気象災害の記録が少ないが台風による風水害が多くなったように推定される。

17世紀 (江戸時代) になると人口増加, 土地開発等により, 災害の規模も大きくなった。台風災害が最大であったが, 天明3 (1783) 年には浅間山の大噴火等によりしばしば冷夏になり, 天明の大飢饉 (1783-87), 天保の飢饉 (1832-39) 等が発生した。

2. 明治・大正期 (気象事業創設期)

町に人が集まるようになり, 風水害が深刻になってきた。明治政府が国策として主要河港付近に, セメント, 造船, 化学肥料等の工場群を設立, 日清・日露戦争を経て, 工場群が拡大, 溢水や浸水の被害が拡大した。台風等による水害で東京・大阪等の日本経済の中心が脅かされるようになったので, 1896 (明治29) 年に河川法, 1897年に砂防法が公布された。1923 (大正12) 年9月1日の関東大震災 (死者10万5千余) は, 台風が日本海北部を北東に進んでいる時に発生した。多くの死者を出した火災旋風の発生の一因に, 台風にかき込む南よりの強風があったのかも知れない。

3. 昭和初期

1927 (昭和2) 年の北陸地方の豪雪, 1934年の爆弾低気圧による函館大火・室戸台風 (死者2,702, 行方不明234)・東北及び北海道の冷害, 1939年の猛暑と干ばつ等多種の災害が相次いだ。

4. 戦時下

新聞, ラジオ等による一般向け天気予報は中止された。防災上の見地から昭和17年8月27日特令暴風警報制度が出来た。偶然にもこの日に周防灘台風来襲, 死者・行方不明者1,158, 負傷者1,438名に達した。情報不足のため多くの災害が発生した。

5. 占領下

戦争中の山林の乱伐, 治水工事の放置等で国土が荒廃している時に相次いだ台風の来襲で多くの被害が発生した。1947年のカスリーン台風では, 利根川・荒川の破堤で関東平野は一面の泥海と化し, 東京都の東半分が濁流が押し寄せた。

6. 復興中

1952年日本が独立を回復, 6月には気象業務法が公布された。1953年には北九州豪雨 (6月, 死者行方不明1,013), 南紀豪雨 (7月, 同1,124), 京都豪雨 (8

月、同429)等洪水災害が相継いだ。このため中央気象台(気象庁の前身)では雨量観測所の展開、予報課では防災気象業務に対する体制を整備、防災気象に力を入れるようになった。1954年には日本海難史上最大の被害(死者1,430)をもたらした洞爺丸台風、1959年には、伊勢湾台風(死者・行方不明5,098)等大被害をもたらした台風が来襲した。1956年7月1日中央気象台が気象庁に昇格した。

7. 高度成長下

都市への人口集中が急激に進行し、急傾斜地や低地帯等に住宅や工場等が建設されたために土砂災害や浸水等の被害が急増した。1961年には大被害をもたらした1934年の室戸台風と同じスケールの第2室戸台風が同一地方を襲ったが警報発表が適切で、対策等が整備されたおかげで死者・行方不明者は202名にとどめることが出来た。

8. 衛星時代

1974年に地域気象観測システム(アメダス)が活動を始め、1977年に静止気象衛星ひまわりが打ち上げられた。一方気象レーダ観測網も整備されてきた。これらのおかげで気象擾乱の早期捕捉、正確な移動の把握が可能になったことや数値予報の進歩、国及び自治体等の災害対策の充実等により、人命の損失は格段に減少している。

9. 地球温暖化時代

地球温暖化の影響はまだ明らかでないが、「大雨が増える一方で雨の降りにくい所も出てくる。凶暴な台風が増加するが台風の発生数は減少する」、という説もある。

10. 戦後の自然災害による死者・行方不明者数の変遷

1956~1960年がピーク(8,359名)で以後減少、近年は観測システムの充実、予報技術の進歩、対策の充

実等により、1/10以下に減少している。

11. 石碑が語る気象災害

大災害の被災現場に石碑などを建て犠牲になった人々を供養すると同時に災害への心構えについての教訓や伝承を刻んで後世の人達への戒めとしていることはよくある。

第I部 大災害の系譜

明治以降の大災害55例について、状況または背景、被害の2項目に分けて、写真、図表等も使って簡潔で適切な解説がある。例えば台風の場合、状況または背景の所では、発生日とその場所、発達過程、経路、最低気圧、観測された最大瞬間風速や降水量、河川の状況、潮位等の詳細についての説明がある。被害の所では、人的な被害を含め、あらゆる種類の被害状況などが示されている。

第II部 気象災害一覧

西暦567~2007年の2461例の気象災害を種類別(異常乾燥、大雨、大雪、崖崩れ、火災、湯水、降雹、洪水、高潮、雪崩、濃霧、暴風等41種類)の災害に分類して災害に関する簡潔で適切な解説付きの年表形式で示されている。

第III部 索引

術語、事項等、気象災害の種類別に、発生日、月、日、災害番号、本書作成に当たって参考にした論文・著書35篇が示されている。

私自身気象庁予報課で、昭和29年から47年まで約18年間、防災気象業務を担当していた関係で、気象災害には特別な関心を持って関係図書を収集しているが、本書はこの分野における最も利用価値の高い図書の一つとして責任を持って推薦できる良書である。

(日本気象技術士会長 土屋 清)